

平成27年熱中症での救急搬送事例

1 熱中症での救急搬送事例と予防のポイント

室内で熱中症になった事例

- 21時頃、娘が母親宅を訪問した際、居室内ぐったりしている母親を発見したもの。居室内は窓が開いており、クーラー、扇風機等も使用していなかった。
【平成27年7月 女性（76歳） 熱中症（中等症） 気温28.0℃ 湿度67%】
- 3時頃クーラーを切り、窓を開けて就寝、7時半ごろ起床した際、室内がかなり暑く、大量の汗をかき、気分も悪かった。8時頃水を飲んだが嘔吐したもの。
【平成27年8月 男性（73歳） 熱中症疑い（中等症） 気温29.5℃ 湿度73%】
- 15時30分頃、帰宅した息子が暑い部屋でぐったりしている母親を発見したもの。
【平成27年6月 女性（79歳） 熱中症（重症） 気温28.8℃ 湿度47%】

<予防のポイント>

気温が高なくても湿度が高いと、熱中症になることがあります。

- ◇ 水分補給を計画的、かつ、こまめにしましょう。
- ◇ 窓を開け風通しを良くしたり、エアコンや扇風機等を活用し、室内温度を調整するなど、熱気を溜めないようにしましょう。

乳幼児が、車の中で熱中症になった事例

- 車両内に子供2人を乗せた状態で、母親が車両のカギを車内に残したまま誤って施錠したもの。【平成27年5月 女児（2歳）、男児（1歳） 熱中症疑い（いずれも軽症） 気温23.3℃ 湿度47%】
- 公園を散歩して、帰宅するために母親が自動車の左後部座席のチャイルドシートに男児を乗せ、ドアを閉めたところ、原因不明なるもすべてのドアが施錠された。鍵も運転席に差したままで、開錠できなくなったもの。
【平成27年6月 男児（2歳） 熱中症（軽症） 気温25.4℃ 湿度63%】



<予防のポイント>

夏場の車内の温度は、短時間で高温になります。

- ◇ 少しの間でも子供を車内に残さないようにしましょう。
- ◇ 子供が、自分で内鍵をかけたり、車の鍵で遊んでいて誤って、ロックボタンを押してしまい閉じ込められる事故が発生しています。車を降りる際は、鍵を持って降りましょう。

屋外で作業中に熱中症になった事例

- 8時頃から屋外で工事現場の作業をしており、14時頃に手に力が入らない症状があり休んでいた。その後、全身性の痙攣症状が発生したものの。
【平成27年6月 男性（61歳） 熱中症（重篤） 気温26.0℃ 湿度62%】
- 13時頃、畑から帰ってこない夫を心配して様子を見にいくと、畑で倒れ意識を失っていたもの。【平成27年7月 男性（92歳） 熱中症（死亡） 気温34.0℃ 湿度44%】

屋外で並んでいて熱中症になった事例

- 飲食店の行列に並んでいた際、一時的に意識消失し、その後も意識消失を繰り返したものの。
【平成27年9月 女性（21歳） 熱中症（軽症） 気温32.5℃ 湿度55%】
- 祭り会場で、列に並んでいた女性が、突然しゃがみ込み意識朦朧となったもの。
【平成27年9月 女性（73歳） 熱中症（中等症） 気温25.6℃ 湿度71%】

運動中に熱中症になった事例

- マラソン大会で走っていたところ意識を失って倒れたもの。
【平成26年6月 男性（53歳） 熱中症（重症） 気温22.2℃ 湿度73%】
- 河川敷野球グラウンドで野球の試合中、気分が悪く体調不良を訴えた。その後、痙攣及び全身が痛くなったもの。
【平成27年8月 男性（38歳） 熱中症（重篤） 気温34.1℃ 湿度57%】

複数の熱中症患者が発生した事例

- 夫婦で屋外を散歩中に、暑さのため、歩行困難となったもの。
【平成27年7月 78歳男性、76歳女性 熱中症（いずれも中等症） 気温31.0℃ 湿度61%】
- 小学校の運動場で小学生がサッカーの練習中、4人が悪心、頭痛、脱力感を訴えたもの。
【平成27年7月 9歳～10歳の男女4名 熱中症（いずれも軽症） 気温30.7℃ 湿度59%】
- 高校でダンスの部活動中、多数の生徒が気分悪くなったもの。
【平成27年7月 15歳～17歳の女性9名 熱中症（疑い含む）（中等症3名、軽症6名） 気温28.6℃ 湿度76%】

<予防のポイント>

クラブ活動等では、複数の生徒が熱中症で救急搬送されています。指導者等は、無理のない活動に配慮しましょう。

- ◇ 水分補給を計画的、かつ、こまめにしましょう。
- ◇ 屋外では帽子を使用しましょう。
- ◇ 襟元を緩めたり、ゆったりした服を着るなど服装を工夫しましょう。
- ◇ 指導者等が積極的、計画的に休憩をさせたり、体調の変化を見逃さないようにしましょう。
- ◇ 実施者は自分自身で体調管理を行い、体調不良の時は無理をせず休憩しましょう。

2 高齢者の特徴

(1) 皮膚の温度感受性の鈍化

ヒトが暑さにさらされ、皮膚に存在する温度センサーが暑さを感知すると、その情報は脳の視床下部にある体温調節中枢に伝えられます。その情報に深部からの温度情報も加えて体温調節中枢が暑いと判断すると、皮膚血管や汗腺に命令を出し、皮膚血流量や発汗量を増大します（自律性体温調節）。さらに冷房の利用や衣服の調節などといった行動性体温調節も引き起こします。高齢者の冷房使用頻度が少ないのは、老化に伴い皮膚の温度センサーの感度が鈍くなり、暑さを感知しにくくなるのも一因です。皮膚の温度センサーが鈍くなると、自律性体温調節の発動も遅れてきます。この行動性と自律性の体温調節の鈍化が、体に熱をため、熱中症の発生へと繋がります。

(2) 熱放散能力の低下

脳が暑いと判断すると、自律性体温調節として皮膚血流量や発汗量を増加して熱放散を促進します。老化が進むと皮膚血流量と発汗量の増加が遅れ、その後の体温の上昇に伴う増加の程度も小さくなります。そのため、高齢者は若年者より熱放散能力が低く、体に熱がたまりやすくなり、深部体温がより上昇しやすくなります。

暑くなると、皮膚への血流量が増加するため、心臓にもどってくる血液量が減少します。それを補うために心拍数が増加し循環系への負担が大きくなります。このような状態になると、循環器系に基礎疾患があったり、疾患はなくても機能的に低下している高齢者は、熱中症にかかりやすくなります。

(3) 体液量の低下

高齢者は若年者より体液量および血液量が少ないことも知られ、この減少も老化に伴う熱放散反応の低下につながります。

一般に脱水が進むと、のどの渇きが起こり、自然に飲水行動をとります。しかし、高齢者は、脱水が進んでものどの渇きが起こりにくくなっています。これは脳での察知能力が低下するために起こるようです。

熱中症環境保健マニュアル2014（環境省）より

